

四 「守ろつゝ美々川・ウトナイ湖の自然」

葉山政治（日本野鳥の・ウトナイ湖レンジャー）

我々三団体が、国のプロジェクトである放水路に反対してまで守りたいと思っている美々川・ウトナイ湖の価値、良さを、一五年たった今、改めて再確認していただきたいということで、その環境についてスライドでご紹介したいと思います。

ウトナイ湖についてはみなさんよくご存知と思いますが、水面面積が二三〇ヘクタール、まわりは色のうすい部分が湿原、そして色の濃い部分がハンノキを中心とした林です。そして水面とまわりの湿地を含めた五一一ヘクタールが国設の鳥獣保護区、また、遺産条約の指定地にもなっています。

美々川はウトナイ湖に流れ込む水の八割を供給する河川です。こういう曲がりくねった形をしており、ほとんど人手の入っていない原始河川です。そして美々川も、まわりに湿原と林を兼ねそなえた河川です。

美々川・ウトナイ湖の環境は、その昔はかなりありふれた、ごく普通の環境だったと思います。このうすい所は一九五三年のウトナイ湖周辺の湿原です。この赤い色で表わされているのは約三〇年後の姿で、一九八五にはこの部分しか湿地は残っていませんでした。ですからウトナイ湖・美々川というのは、私たちが失ってきた湿原環境で、唯一残された部分と言っても良いかも知れません。勿論、サッポロ以南の石狩低湿地帯と呼ばれるその部分でも失われた環境です。

美々川はいたる所から水が湧いています。それが集って美々川の環境ができています。この環境を残すだけでも放水路に反対する価値があると思

います。いかげんかでしょうか。美々川は、源流は千歳空港からわずか車で一〇分の距離にあり、国道沿いをずっと流れているという身近な所にある環境でもあります。

数多くの湧き水が集まった美々川は曲がりくねって流れています。周辺にはヨシやイワノガリヤスでできた湿地と、ハンノキやミズナラを中心とした林になっています。美々川は直線距離で約一〇キロを、曲がりくねって二〇キロかけてかけてウトナイ湖に流れこんでいます。

美々川にはミズバショウやコウホネなどに混じって、絶滅が心配されているミクリなどの植物も生育しています。ちょうど今は美々川にベニザケがあがっている時期です。ベニザケは中間に湖や大きな池のある河川が元々の生息場所とされています。今のベニザケは水産庁が放流したのですが、かなり良い回帰率を示していることから、美々川・ウトナイ湖が豊かな環境であると言えると思います。

これは放水路計画の図ですが、この山地に降った雨が地下水となって、美々川に流れこんでいます。そしてそこを横切るのが放水路です。美々川の湧水地点の標高が約一〇メートル、そしてウトナイ湖の標高は、湖の一番深い所で海面上で一メートルです。放水路は海面下一〜三メートルの所を掘り進んでいきます。そうすると地下水はみんな放水路に抜けてしまうというところは誰でもすぐに分かりますね。そういう反対意見が出ますと、この点線の部分の所に約一五キロにわたって地下水の流れこみを防ぐために遮水壁（地下水を止めてしまおう壁）を造るといいます。そえすると、今度は地下水が放水路の向こう側に行かなくなるとい

う危険が生じます。そこで開発局が今いっているのは、ここに井戸を掘って、山地側から来た地下水を汲み上げ、約二五〇メートルぐらいですが放水路をパイプでわたし、再び地下に入れることで美々川の水を確保するということです。

開発局は今年の五月に、水量確保のメドが立ったと発表しましたが、はたしてその水量確保が永久に続くものか、また無数の地点から湧いている地下水を、数本の井戸からの給水でまかなえるものなのか非常に疑問です。さらに遮水壁も永久に地下水の流れこみを防ぐことができるのか、何の保障もありません。保障の無い計画を、多分できるだろうということで実施した場合、もし失敗したら、ウトナイ湖や美々川の水環境は失われてしまうことになりそうです。

地下水対策を行うだけで、四七〇億円の予算が工事に組みこまれていきます。私たちの税金を、何の保障もないことに使うこと自体、問題があると思います。

三月には、二万羽を超すガンの群れが、昼間の採餌場からウトナイ湖に戻ってくる光景を見ることができそうです。ウトナイ湖はマガンやヒシクイなど天然記念物の水鳥たちがたくさんいるということで、ラムサール条約の指定湿地にもなりました。ウトナイ湖は周辺に広い湿地性の草原を持っています。この草原には夏の北海道を特徴づける生物がたくさんいます。最近、道東ではめっきりその姿を見なくなつたといわれるシマアオジを見ることができそうですし、同様に数が減つたといわれるオオジシギの繁殖も確認されています。オオジシギにとつてウトナイ湖は、渡りの重要な中継地にもなっています。

ウトナイ湖ではよく洪水があります。これは一九八二年の洪水ですが、観察路の三分の二が水没しています。しかしウトナイ湖の環境は、このような洪水によって保たれているのです。ですから一定規模の水が地下水によって確保されたからといって、維持できる環境ではありません。しかも苦小牧港が海岸を掘り下げて造られた時、その時期に合わせてウトナイ湖の水位の低下がみられたことがあります。原因ははっきり分かりませんが、護岸、コンクリート打ちが終わると水位の低下も収まるということから、人知れず地下水の移動がおきて、水位が低下したのかも知れません。

放水路計画が出てウトナイ湖は法的にもいろいろと守られています。美々川は何ら法の網がかけられていません。実は放水路計画が出る前は、北海道は美々川流域を自然環境保全地域にしようとする動きがあったのですが、どうも開発局からストップがかかったようです。そのため美々川には産業廃棄物処理場から処理水がたれ流しになっているところもあります。

放水路の悪影響は美々川・ウトナイ湖だけではなくて、農業問題とか太平洋岸で行われている漁業にも大きな影響を及ぼします。開発局は放水路計画を初めから見直して、白紙撤回をもらいたいと思います。(終)